福岡
福祉活動専門員の
まなこ
社協活動前進のために
No.27　1989年3月発行　福岡県専門員連絡会　まなこ編集委員会　印刷　コロニー印刷

「ニーズ・サービス論」の行方

甘木市社協　前田　正剛

「入浴サービス」や「給食サービス」を始めとする「在宅福祉サービス」という言葉が、最近地域の人々の中でも使われるようになってきた。

「ボランティア」と同じように、ことばとしての市民権を得てきたのではと感じる。

私が社協に入ったのが一九八一年。ちょうど国際障害者年の一年目の年であった。

当時の研修会や会議では、「ノーマライゼーション」あるいは「入浴サービス」、「給食サービス」、「共同作業所」といった「在宅福祉サービス事業」のありようがさかんに論じられていたのを記憶している。

特に「在宅福祉サービス」については、導入するにあたっての調査方法、利用者の発掘の方法、そしてサービスの内容や提供方法に話題が集中していた。

国際障害者年であることが強く意識され、個別的な課題をどう普遍化していくのかが問われていた時期でもあった。このことは、いきおい「入浴サービス」や「給食サービス」といった個別サービスをいかに社協事業として拡大していくのかという方向に論議とその努力を傾注させた。

このころ、市町村社協が「在宅福祉サービス」に乗り出す動機づけとしては、「隣りの社協が始めたから、うちの社協でも始めよう」、「あそこの社協には負けられない（気持ちの中で）」ということもままあった。

まさに、「在宅福祉サービスをやらずして社協にあらず」といった風潮の全盛期であった。

ここ数年、「このサービスを始めた……」などという話題こそめっきり少なくなったが、それでもまだ「在宅福祉サービス」のあり方、ありようは研修会の夜の酒の席では、必ず「つまみ」として顔を出す。

「社会福祉ニーズの多様化に対応して、サービス供給体制を多元化しなくてはならない」といった主張は、結果としてなにをもたらしたのか。

それは、今や誰の目にも明らかになっている。

民生委員制度創設七〇周年事業として取り組まれ始めた「愛のネットワーク事業」は、自助努力、相互扶助ばかりを強調しがちで……

今こそ、人間の尊厳に値する社会保障の確立を求める運動を各地で広げていかなくてはならない。

おいでました、山口へ

福岡ブロック専門員研修会・山口県豊北町への誘ない

昭和六十三年三月七・八日。福岡ブロックの精鋭一二人、専門員のご一行様は、山口県豊北町社協へ視察研修に出かけた。番外編ぬきのまじめレポートをお届けする。

太宰府市社協　緒方　徹

豊北町の概要

豊北町は、人口一六、九八六人、世帯数五、二二二世帯、老人人口比率二〇・五％、過疎化率は、山口県下ではトップクラスの半農半漁の町である。

豊北町社協の取り組み

町内は七つの地区にわかれており、平成二年までに、年次的に地区社協の育成をはかり、三年度全地区で福祉の輪づくり運動に取り組む計画を進めている。現在、阿川地区をモデル地区としてユニークな輪づくり運動を展開中である。

しかし、事務局自体は事務局長以下三人体制で、いろんな対応や財源等問題点もかなりあるように思われた。

豊北町の今後の取り組み

一、給食サービス事業

平成二年度から、独居老人を対象に週一回の予定で準備をすすめている。希望者調査も終了している。しかし、町の面積が広いため、調理、配送・配達のボランティア確保に頭を痛めているそうだ。

二、精神障害者の共同作業所

精神障害者の家族の方の相談が増えている。社会参加の一つの方法として、共同作業所の設置が求められている。

三、老人福祉作業所

老人人口も増え、ゲートボールだけでは何かもったいない。定年退職後も、もう一度熱中できるような仕事場や地域づくりに一役を担えるような場づくりが望まれている。

豊北町社協が当時者組織にかかわって困っていること

一、父子会

六二年より父子家庭のお父さんの集いを行っているが、母子家庭と違い、人集めが難しい。

二、ねたきり老人家族の会

社協主導型になってしまい、早く会のリーダー役を発掘しなければ、ますます社協まかせの会になってしまう。

三、独り暮らし老人の会

組織的には、地区ごとに七つの会が結成され、連合会も組織されているが、それぞれの会がまだ自立していない。

四、老人クラブ

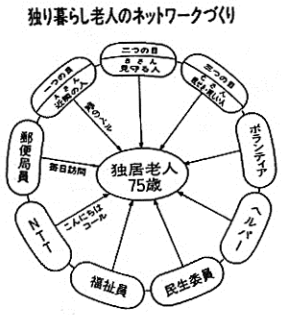
老人クラブ、身障更生会、手をつなぐ親の会の団体事務局を社協で受け持っているが、ここ三年、団体が自立できるよう育成強化に努めた結果、六三年度から、会員の中から事務局長を選任するなどして、身障更生会と手をつなぐ親の会は、ほとんど自分達の手で会の運営ができるようになった。しかし、老人クラブは、まだまだ社協にたよりきっている。

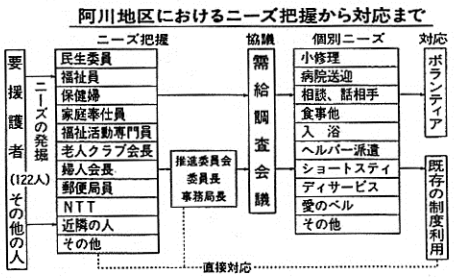
以上が、豊北町社協の現状である。当日は、石津事務局長、山村専門員の両氏にお話をうかがったが、事務局自体非常にまとまっており、ヤル気満々といった感じがした。住民自身も、過疎化、老齢化といった問題に直面しており、町づくりに対する意識はかなり高いように思われた。

ここで一つ、モデル地区社協の指定を受けている阿川地区の活動を紹介する。

ここでは、独り暮らし老人のネットワークとして、「需給調整会議」、「三つの目による見守り体制」というユニークな活動を実践している。「需給調整会議」は、六五歳以上の老人、寝たきり老人、心身障害者、母子家庭等をリストアップし、各委員さん達でそのニーズを調整し、対応していく。

「三つの目による見守り体制」は、独居老人一人に対し、近所の人や親せき、知人を割り当て（三つの目）温かく見守ろうというシステムである。





他にも、郵便局員による、声かけ運動（配達にかかわらず）、NTTの女性による愛のこんにちはコールなど、きめ細かいサービスを展開している。

行ってみる価値はあると思う。

お役に立てば（デスクワーク・レポート）

ネットワークは売れっ子です

「ネットワーク」。社会福祉の分野で、今いちばんの〝売れっ子言葉〟です。

「ネットワーク」はいろいろな立場から提唱され、現に行われています。

「保健所保健・福祉サービス調整推進会議」、「高齢者サービス総合調整推進会議・高齢者サービス調整チーム」、「訪問看護等在宅ケア総合推進モデル事業」など。これらは、国の政策としてのネットワークの例です。

「大阪府：痴呆性老人対策ネットワーク化推進事業」、「神奈川県：地域保健・福祉サービス供給システム」、「中間市：地域老人福祉システム開発育成事業（福岡県）」。これらは、地方自治体の政策としてのネットワークの例です。保健所を中心とした保健事業あるいは健康づくりの事業は、ことさら「〇〇ネットワーク〇〇〇」という言葉を使わずとも、ネットワーク化の流れにあるとりくみが行われつつあるといえそうです。

「山口県：在宅福祉サービス推進運動（福祉の輪づくり運動）モデル地区育成事業」、「広島県：福祉のネットワークづくりモデル事業」、「福岡県：愛のネットワーク推進モデル市町村指定事業」、「川崎市：福祉と保健の総合サービス事業」。これらは、社会福祉協議会のネットワークの例です。

その他にも病院を中心とした存宅医療のとりくみ、老人福祉施設による地域サービス事業のとりくみなど多種多様です。

いずれも、保健・医療・福祉の総合化に主たるねらいを置いているといえそうです。

事例をみると

さまざまなネットワークの事例が報告されていますが、どの事例でも基本的に一致しているのは、名称・対象は異なるものの、調査の実施、分析、評価を通して、まず地域の問題の所在を明らかにすることから始められている点です。

調査とその活用の成否が、活動展開の成否を決定づけているといってもいいようです。

▽大阪府松原市「在宅寝たきり老人実態調査」

松原市、医師会、阪南中央病院、松原市立病院、社会福祉協議会、民生委員児童委員協議会、保健所の代表で検討された保健婦、看護婦、ケースワーカーによる聞きとり調査を実施。

▽広島県甲奴町「ひとり暮らし老人・寝たきり老人・障害者の全数調査」

福祉推進委員会を設置し、まず右の調査を実施。各地区（五地区）より計五四名の福祉推進委員を選出して行う。調査項目―ひとり暮らしは、①基本的事項、②住宅、③医療、④身辺介助、⑤外出、⑥近隣関係、⑦地域参加、⑧相談・助言、⑨福祉制度の利用。ねたきり、障害者には加えて、⑩日常生活動作（ADL）、⑪介護者の地域参加について細かくデーターが記載されている。

▽広島県府中市「ひとり暮らし・二人暮らし老人の実態調査」

ネットワーク推進協議会を結成し、まず右の調査を実施。調査項目は甲奴町とほぼ同じ。調査を受けて、同年度に、①介護者のつどい、②元町ひとり暮らしのつどい、③食事配食（市社協・地域婦人会）、④緊急連絡票をひとり暮らし老人全世帯に配布、⑤緊急ベルの点検、⑥要援護者ネットワークの形成（地区社協）、⑦ふれあい行事（地区社協）などを行う。と同時に福祉計画の策定を始める。また次年度初めに十地区で福祉講座を開催。この間、施設との連携強化、ボランティアグループの育成、民協との協働活動を図る。

▽大阪府枚方市「老人介護者実態調査」

社協の老人福祉部が実施した右の調査により、当事者の生の声を聞く場としての当事者の組織化の必要性が明らかとなる。その結成準備委員会を当事者、医師会、歯科医師会、保健所、老人福祉課、民生委員児童委員協議会、ボランティア、社協関係一五名により組織し、「枚方市ねたきり老人介護者（家族）の会」が結成される。同時に支援ボランティアの組織化を進めながら、社協と介護者（家族）の会の共催で「介護講習会」を続ける。次いで、「保健・医療・福祉関係者懇談会」を社協が呼びかけ、それが「枚方市老人ケア合同連絡協議会」（略称：五者協）へと発展する。

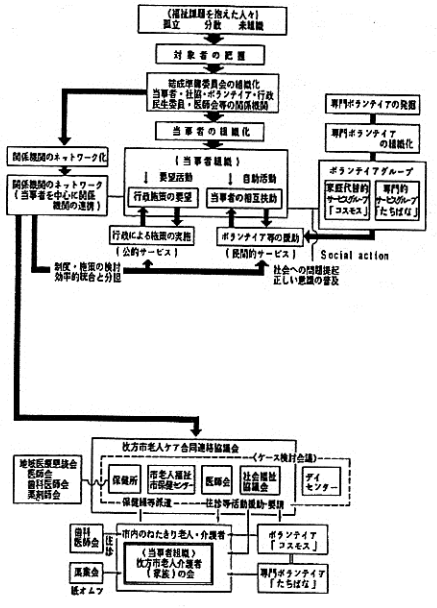
やっぱり調査やね

調査実施時点からの拡がりの設定、調査結果を生かす拡がりの設定が、活動の成否にとって決定的な要素であることを事例は教えてくれます。

『地域福祉活動は、調査に始まり調査に終わる』という教訓を大切にしなくてはなりません。

ネットワーク活動についての問題提起と論戦を、この紙面でもやろうではありませんか。論議はたたかわしてこそおもしろい。

（参考3）「当事者組織と在宅福祉のネットワーク」
大阪府枚方市社会福祉協議会



いかにも“チッポケ”に見えてくる

浮羽町社協　宮崎　高義

ある日、事務所の電話が鳴った。「主人が最近ボケがひどくなってしもち、だいたいは一緒に施設に入るごつ申込んどるばってん、早う主人だけでも入れてもらえんでしょうか。」

この家庭は、奥さんが、十年くらい前に下半身マヒになり、以来入院生活で、ご主人は四十過ぎた長男が一人でみている。

実はこの息子さんが、三か月前に役場をとおして、少しボケかげんの父親に何か手立てはないか相談にみえ、この時は保健所のボケ相談室に取りついだ。

また息子さんの「何とか家で面倒をみたい」という要望で、社協から福祉給食を配食することになり、その折はできるだけ声かけをしていくことにした経緯があった。

そこで、電話の内容を詳しく聞いて見ると、その後症状が日ましにひどくなり、夜中の徘徊や、横に寝ている息子を大きな声で起こし、また常時オムツを当てがわなければならず、妻として、母として居ても立ってもいられないという。

奥さんは社協ならば何とかしてくれるかもしれないという思いで電話をして来たのだろう。

その日の夕方、家庭を訪問、初対面の私に、ベッドの中から、ねたきりの状態でお茶もあげられない事を詫びながら、自分の身の情けなさと息子の看病への気づかいを切々と訴えた。話をしている最中もご主人は、家の中を徘徊し、時々大きな声で奥さんの名を呼んでいる……。

奥さんには、関係の機関に照会したがすぐに入所できる状況でない事を説明した。ただ少し遠いが老人保健施設があいているので、当座そこに入所することも考えられることを勧めてみた。この晩、家族、親戚が民生委員さんも交えながら話しあい、結局、保健施設に預けることになった。

後日、息子さんが事務局を訪れ、父親を預けた寂しさと、安堵感とか入りまじった表情で、「やっとゆっくり寝れるようになりました。」と話され、今から父に面会に行くとのこと。

はたして、これで良かったのかという思いと、否、他に方法はなかったのかという思いが私自身の中に錯綜した。

はやくから、在宅福祉が叫ばれながら、まだまだ在宅のお年寄や身障者を支えていくだけの制度や福祉サービス体制が整備されていない現状をみるとき、社協だけが福祉の現場の対応を担うわけではないが、このようなケースに出会うと、自分のやっていること（社協の在宅福祉サービス）がいかにも「チッポケ」なものに見えてくるのである。

奮い立つ思い…「マグリットの石」

飯塚市社協　手塚　弘幸

最近発売された、さだまさしのLP「夢の吹く頃」に「マグリットの石」という曲が収められています。これは、現代人が日常生活で抱いている不安感や危機感を「マグリットの石」（画家ルネ・マグリットの代表作「ピレネの城」のこと）に置き換えて表現するとともに、人間の時代における真の生き方を示唆したかなりインパクトの強い曲で、自らの今の生き方をあらためて問い直さなければならない思いにかられます。

何とも聴きごたえのある一曲です。

♬あいそ笑いで生きるより
　ののしりの中で死にたい
　嘘で磨いた輝きよりも
　真実のまま錆びた魂が欲しい
　売り渡してたまるか

このプライド
・・・・・・

さだまさしが悲壮感を込めて歌いあげるこのくだりは何度も心にこだまします。ここに自らの信念を曲げ、現実におもねて生きる、あるいは生きなければならない人間の悲しい生き方に対する勇気ある〝挑戦〟として心に強く伝わってきます。

ひるがえって、私たちは今、社会福祉の現場でこの挑戦を放棄してしまっているような気がします。

いわゆる「多数者」に冷たく見られるのを怖れ、自らの誇りを捨てて、「あいそ笑い」でその場をにごしている。そんな欺瞞に満ちた福祉活動は、たとえこの時代に受け入れられようとも所詮、「嘘で磨いた輝き」にしかならないはずです。今こそ、私たちは社協マンとしてのプライドをもち、「少数者」の立場からその真実を主張していく勇気ある挑戦をしていかなければならない時代にきているのではないでしょうか。

今、「マグリットの石」を聴き返しながら、そんな奮い立つ思いに駆りたてられています。

福祉の充実

—それは"指丸(ゆびまる)"—

春日市社協　本田　博毅

私の社協活動の履歴を述べます。「社協マン」としては、二度の履歴を持っています。

一度目は、昭和四九年。当時社協が運営していた「内職センター」が出発でした。二三歳でした。

ここでは、軍手の製造やある業者の下請けとして幼稚園児服や婦人服を製縫していました。低所得者福祉事業と自主財源の確保として、昭和三六年から昭和五四年まで運営されました。仕事の内容といえば、午前中は昼寝？午後は出来上がった服等の納品に行くだけ。給与も安ければ仕事もほとんど暇という福祉活動でした？？。

ところが昭和五〇年。内職センターで楽をした分まとめて忙しくなりました。

全国に先駆けて、三六五日無休の老人給食を始めることになりました。身障児通園施設の調理室を借りて、婦人民生委員さん二名、ヘルパーさん一名、内職センターから転向してもらった方一名、それに私の四人というスタッフで出発しました。なにせ年中無休です。大変なことは分かっていましたが、月に休みがとれるのが一回から二回くらいです。一年間この勤務体制で頑張りました。

しかし、ここで疑問が生じてきました。少数の従事者の犠牲のもとでの福祉。福祉とは？

そこで、自分の可能性を試したくて、昭和五二年にある企業に転職。八年間、福祉活動から販売活動へと方向転換しました。そして昭和六〇年。最後のご奉行という気持ちで社協にお世話になりました。これが、二度目の社協活動の始まりです。

そして、当社協もそうですが、共募や専門員の研修会などに参加してみると、どこの社協も職員が若返りしているのには驚かされました。社協も法制化され、組織化され、「高齢化社会に向け、いよいよ社協の役割も変わってきたな」と感じました。

ところが、社協の存在を永続的に保障、保護していく制度、または行政の役割といったことは具体的に何一つ解消されてはいません。

昔と体質は同じです。

本会は、全国的に進んでいると思われていますが、より安定的な福祉サービスを進めていくための自主財源の確保という大きな課題は、他社協と大同小異ではないかと思います。社協活動を考える時、暗雲に覆われ、太陽が見えてきません。何をおこなうにもお金が必要との認識はあっても、具体的な方法、財源確保の確立ができないことには、真の社協活動は安定し得ないのではないかと思います。

社協職員の低給与、不安定な身分の解消なくしては、福祉サービスの充実がないと叫ばれているならば、ヒモ付きでもいい、何でもかまわない。社協の財源確保こそが、今後の私の福祉活動の重点目標と考えています。

この道は遠くけわしい
しかし　人びとの
幸せを　より高めるために
手をとりあい　歩きつづ
けようではないか

せ～ん専ちゃわん～ちゃん～ちゃん あそぼよーぼよーぼよー

早乙女　田吾作

いつもいろいろな研修に参加して思うことがあります。

社協の職員の皆さんは、なんて真面目で立派な方たちばかりなんだろう。

特に専門員さんはえらいなあ。研修会の時間中はもちろんのこと、懇親会の席でも帰り道でも、フラフラしながらも一所懸命に仕事の話。

平日は時を忘れて夢中で仕事、休日はボランティアにまじって汗水流しながら力いっぱい福祉活動、毎朝毎夕、福祉のこころで頭の中はいっぱい。

酒の肴に仕事、夢の中で仕事、仕事のあい間を見て仕事。

えらいなあ……。

皆さんはいつ、どこで、どのような形で休息をとっているんだろう？趣味もやっぱり仕事かなァ。

高い？月給をいただいているのだから、毎日を精一杯働いて一日も早く地域福祉の充実をはかることが専門員の使命でしょうけれど、もう少し、ほんの少しでいいから仕事と酒以外で各ブロックの横のつながりができないものでしょうかネ。

たとえば、スポーツ大会を開いてブロックごとに競うとか、趣味のクラブを結成してみるとか、何でもいいから楽しいつながりがほしい気がします。

私は不真面目なので、いつもそんなことばかりを考えています。

でも、多くの専門員さんは覚醒剤「ふくし」を打ち過ぎて、もう仕事以外は目に映らないのかもしれませんネ。

専門員の皆さん、体を大切にしながら福祉活動に精を出してください。

私も社協にお世話になっている以上は、微力ながらも地域福祉の推進に邁進する覚悟であります。

ただし、病に伏さぬようにマイペースでマイペースで……。

社協びとよ、鬼になれ

―マンパワー論に寄せて―

昭和六二年度厚生白書のタイトル「社会サービスはこう展開する―社会保障を担う人々」は、今の社会保障・社会福祉政策の動きやそれをめぐる論議をとても象徴的に示している気がします。

政策としてのマンパワー対策の動きは急です。初めての介護福祉士・社会福祉士の国家試験が行われ、五月にはその合否発表があります。ボランティアや福祉教育関連の政府予算案がはね上がりました。地域住民、各種ボランティア等の「インフォーマル部門」のマンパワー拡充は、今や重要な政策課題となりつつあるようです。

それを意識しつつか、あるいはせずか、私たちは、たとえばボランティア講座を企画し、参加者に「ボランティア像」を語り、たとえば住民懇談会を企画し、参加者に「住民像」を語ったりもします。

しかし、そういう私達がいちばんあいまいにしているのが、実は「社協びと像」ではないでしょうか。

地域・自治体運動関連の本などの中にも、たとえば次のようなるほどなと思わされるような文章を時々見つけて、考えさせられてしまうこともあります。

『そのリーダー像は、なべて「仲間や他人に対して優しくて、よく意見も聞いて学び合うが、自分自身のあり方はきっぱりと自分で決める」というものです。』

『主体性の確立が、何より自分の目で見、自分の頭で考えることから始まる、というのであれば、やはり、他人の助けを借りずに、まず自分の力で事実にぶつかる努力をするのでなければなるまい。ここから現場主義とでもいうべき思想がでてくる。事件の現場に、それもなるべく核心部分に自分の身を置く、ということをいつも心がけるのである。そして核心部分に関わっている人々に会いその心を思いやるのである。

そのためには、いわば尻軽でなければならない。私は、とくに地域運動の活動家は、尻軽的人間像をもって第一級であると思っている。』

『いまもし地域・自治体運動（自治体労働運動も、本来その一部です）でリーダーシップとでもいうようなことを考えるとしたら、それは一にも二にも創造的である、ということです。たとえば、あれこれの傾向や立場から出てくる方針や政策を批判するだけでは良くても一〇点しかあげられません。あとの九〇点は自分たち自身の力で正しい方針・政策を編み出せるかどうかということです。そしてさらに、その方針・政策を実現するために組織もつくり、それを協同の力で経営しつつ、絶えず新たな発展を具体化できる人間像をめざして互いがたかめ合えるかどうか、ということです。』

「社協びと像」は、すなわち「社協像」でもあります。

同じような意味合いで、一九八一年一月五日発行の北九州市職労の機関誌「北九の仲間」に心ひかれる文章を見つけました。長くなりますが、全文を紹介します。これは、文化論です。直接に社会保障・社会福祉あるいは地域運動を論じた文章ではないだけに、いろいろな考え方ができておもしろいのではないかと思います。読後感想文を書くつもりで読んでみてください。タイトルは、「鬼あれこれ」、執筆者は坂口一正さんです。

『もう七、八年前のことになるが、わらび座が「東北の鬼」という舞台を北九州にもってきたことがある。南部藩三閉伊の百姓一揆の指導者伝兵衛が雪の中から白面の鬼となってよみがえり、静かに剣舞を舞う姿が印象的であった。

わらび座の茶谷十六氏は「安家村俊作」という本を書き、伝兵衛の生涯から一つの鬼の実像にするどくせまられている。

ところで「鬼」は異形である。それに、けっして人前に姿を現わさないのが常である。倭名類聚鈔に「鬼ハ物ニ隠レテ顕ワレザルヲ欲スル故ニ、俗ニ呼ビテ隠ト云フナリ」と書かれているそうだが、もちろん姿を見せる鬼もいなくはない。宇治拾遺物語に出てくる「こぶ取りの鬼」は、人間を助けたうえにみんなで酒盛りまでしている愉快な鬼であるが、それでも夜明けとともにどこかへ消えてしまうのだから、やっぱりこれも隠なのかもしれない。

まちがいなく身近なところに

いるのだけれども、なぜ姿を見せようとしないのか、このところに鬼の実相をさぐる一つのだいじな視点があるように思えてならない。

姿は見えないけれども、鬼によせる農民の想いは深くあたたかいものがある。神楽には鬼面がつきものだし、それは悪霊退散、豊作祈願の祭りである。能登の御陣乗太鼓の鬼面は、頭にツノがなく、髪は海藻である。漁民の中に生きる鬼の一つなのであろう。いや、鬼とともに生きたのは農民や漁民だけではなかった。鬼婆、鬼子、鬼娘から始まって鬼瓦、鬼アザミ、鬼ユリ、鬼ヤンマに鬼グモ、鬼の醜草とは紫苑の異称である。「鬼が笑う」、「鬼の目にも涙」、「鬼に金棒」、「仕事の鬼」、「鬼の居ぬ間に洗濯」、「鬼も十八、番茶も出花」。

子どもの頃は鬼ごっこに夢中になり、死ねば鬼火に見守られながら鬼籍に入り点鬼簿に書きこまれる。日本人は鬼と共に生き、死のあとも鬼と共にいた。

そして、数々の鬼を見渡すとおぼろげながらも、あらゆる種類の鬼に共通する一つの資質がみえてくる。鬼は、常に庶民の側にあって、権力側の存在、権力にモノをいわせる存在ではない。だからこそ、超人的な力を持ちながら鬼は隠(おに)でなければならず、だからこそ、民衆は鬼を恐れながらも愛し、敬ったのであった。

ひるがえって現代社会を考えるとき、電気や機械に支えられすぎているばかりか、あまりにも権力志向が目立つ世相の中で、わが日本に息づいてきた鬼たちはどのように生きながらえていくのであろうか。そしてまた私たちは、現代に生きる「鬼」を創造することがどのようにすれば可能なのか、しっかりと考えてみたいものである。』

〝社協びとよ、「鬼」になれ！〟

ニュー金太郎

どんな活動分野にいっても同じような顔ぶれしか集まらない状態を「金太郎アメ」という。

金太郎はどこへでも顔を出す。どことでもつきあう。「古い金太郎」は活動請負型であるのに対して、「新しい金太郎」は情報連絡型、共同体的組織人型である。

（池上　洋通）

歩きましょう　あなたと
生命をまもれ　暮らしをまもれ
子どものために平和をまもれ
長生きしていて良かったと
だれもがいえる明日をめざし
歩きましょう　あなたとともに
歩きましょう　なかまとともに
仕事をまもれ　福祉をまもれ
豊かな夢をみんなでまもれ
なかまがいるからよかったと
だれもがいえる明日をめざし
歩きましょう　あなたとともに
歩きましょう　なかまとともに

詩・ともろぎゆきお
作曲・たかはし　べん

高齢者大会愛唱歌集より

「むらさきわたりがに」つり体験記

大川市社協　永田　啓造

私、このたび久留米市の松尾さんに弟子入りいたし、有明海の自然に親しむこととした。

松尾師匠は、あさり、赤貝、あげまきなど、有明海（三池海岸）の潮干狩りにかんしては、その道の権威であるが、弟子入りの第一歩として、今回一〇月一〇日、「むらさきわたりがに」釣りに同行した。

「むらさきわたりがに」とは、俗に言う「竹崎がに」（わたりがに）の小型のもので、甲羅が名刺大である。つり方は簡単である。昔やった「ざりがに取り」イメージでよいかと。

＜しかけ＞

一・五mくらいの竹竿に同じ長さくらいのたこ糸。糸先にみかんなどをいれるナイロンの網。網の中には石ころと、鰺や鰯などの切り身をいれる。これをだいたい一〇本～一五本用意する。

＜つり方＞

干潮前二時間ぐらいに、テトラポットのある海岸線にいき、テトラの間や波打ち際に竿を並べていく。並び終えた頃には、最初の竿を引き上げにかかる。このとき、竿と同じ長さの網を片手で持ち、下からすくうといったあんばいである。

＜その成果やいかに＞

その日は師匠が前日に採りすぎたせいか、二人で三〇匹程。とにかく足場の悪いテトラポットの上を移動するというのは大変で、足、腰が痛くてたまらないのである。

＜料理方法と味＞

甲羅をはずして、水から一五分ほどゆでる（塩少々）。水の位置はひたひた。甲羅には、小麦粉を溶かしたものをつめるとおいしい「かにみそ」ができあがる。味は、竹崎がにと殆ど同じ。酒のつまみには持ってこいなのである。

＜シーズン＞

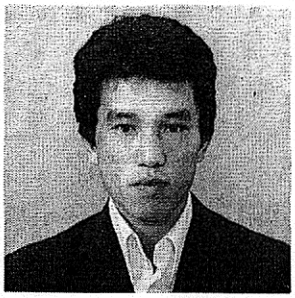
九月下旬より一〇月まで。帰りには大牟田の草木まんじゅうもよい。

新人紹介

明日花咲け

忙がしかー。

浮羽町社協　松岡　次弘



昨年の六月に社協にはいり、五か月以上過ぎました。

浮羽町社協の場合、福祉給食や移動入浴、地域団体の手伝い等、仕事多忙で、あっという間に時間が過ぎました。

今まで会社の営業をしていましたので、全く違う仕事で困惑していましたが、最近ようやく慣れてきたところです。

これから益々高齢化社会が進み、福祉のニーズも多種多様になってくると思いますが、地域福祉のためにがんばっていきたいと思います。

これからみなさまにお世話になる事も多いと思いますが、よろしくお願いします。

少しずつ取り組んでいきます

杷木町社協　塚本　朋子

前任者の退職により、六十二年一月より専門員となりましたが、事務職と兼務のため、専門員とは名ばかりで、毎日、事務と雑用におわれています。また、専門員の研修会等にもなかなか出席出来ずにいます。

通信教育で学んだ事を活動に取り入れ、また、地域住民のニーズに少しでも対応出来るよう、行政、ボランティア、民生委員さん等の手助けを頂きながら、少しずつ取り組んでいきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

ヘルパー歴12年

三輪町社協　川波トミエ

一昨年四月専門員の辞令を受けました。書記も兼務です。書記に就任するまで、十二年間はヘルパーとして活動してきました。社協在職十五年。

与えられた仕事は何でも思い切って（?）挑戦しています。今回の専門員の仕事は、幅広く住民のニーズに応え、地域福祉の向上をめざす重要な仕事だと思っています。

我が社協は事務局長、ヘルパー、専門員三人です。はたしてどれほどやれるか？口と行動力は他に負けないつもりですが。能力の方がついて行きません……。

先輩の皆さん！今後ともよろしく、御指導方お願いします。

ボランティア担当です

筑紫野市社協　南島　秀友

みなさんこんにちは。筑紫野市社協の南島です。

昨年四月からボランティア担当として地域福祉活動に取り組んでいますが、まだまだ半人前で、失敗も多く、上司やボランティアの方々に尻を叩かれながら毎日がんばっています。

今後も〝思い合い〟を活動標語とし、明るく楽しいボランティア育成に取り組んでいきますので、皆さんよろしくお願いします。

編集後記

全国の話は置いておくにしても、我等が福岡県では、専門員だけにとどまらず、全職員を対象にした組織づくりを求める声があがっています。すでに、筑紫ブロックでは、昨年の九月二三日に結成総会が行われたところです。

一方、今まで社協活動にこだわってきた「まなこ」ですが、あまりおもしろくない、新鮮味がなくなったという声も聞こえてきました。

それではと、原稿を全職員の方を対象に募集し、また、社協活動を広い視野でとらえていくことを考えて、いろんな情報や運動の紹介など、「いのちと暮らしの情報紙」として多面的に編集していきたいと考えています。

具体的なイメージとしては、①居心地のいいアルコールの店、②おもしろ人間、③遊び（例えば、私のアウトドアライフ）、④自然保護、平和、反原発など種々な市民運動。

と、いいつつも、原稿が集まらん。ムネンヤ！